論　説

英・米語彙比較にみる文化の「異質性」と「同質性」の接点
～英米文化理解への指針～

浅　間　正　通

1．はじめに

英語教育の現場に携わっていると、語彙にまつわる英米文化の無理解をめぐって驚きを覚えることがある。国際化・情報化社会の到来にともなって、異文化接触の機会が増大し、随分と英米との文化・社会的距離が短くなったにもかかわらず、文化摩擦の事例が後を絶たないのも頷ける気がする。その背景のひとつとして、英語学習の入門期の段階から辞書的意味に依存し、一語一訳（one-to-one equivalents）の習慣が身に着き、安易に英米双方の文化に対して等質視しようとするわが国の英語学習者のスタンスが指摘できよう。結果、「英米文化」という表現それ自体が『英』「米」の文化をひとくくりにした普遍的概念であるかのごとく響くほどである。また、社会的にみた場合にも、英米借用語（外来語）の無秩序なまでの社会的浸透が、原義との間での受容概念のギャップをもたらし、意味領域・指示範囲・概念の「ずれ」に対する認知をますますおろそかにしているのも否めない。今一度、本稿において身近な英米語語彙に焦点を当て、さまざまな側面から比較検討してみたいと考える。

2．語用的誤用の示唆

以前、学生に「彼女は家庭的な女の子だ」なる和文を英訳させたことがある。和英辞典の「家庭的な」の英訳語に頼ったせいなのであろうが、大半の答えは、"She is a homely girl." であった。確かに、この解答は誤りではない。しかし、homelyとは実に危険な意味合いを持つ言葉なのである。*Collins Cobuild English Language Dictionary*（1987）からhomelyの語義をひろってみたい（以下、*COBUILD*）。

If someone is homely, they are not very attractive to look at; used in American English.

イギリス人にとってhomelyは、「飾らない、家庭的な」という誉め言葉になり得るが（鈴木、1985：31）、アメリカ人にとっては、「不器量な、醜い」というけなし言葉になることを知り得れば、その語用に際していかに慎重にあるべきか容易に理解できよう。わが国の英語のほとんどが米国英語を指向していると言われるにもかかわらず、どちらかといえば、英国との間の方が日本文化との間で社会的距離が短いのは意外である。すなわち、同じ「島国」として成立した英国と日本の間にはその保守的風土において男性優位の社会が形成され「内助の功」が尊重された時代が存在したのは否めず、「家庭的な」という形容表現が十分に讃辞表現として受容されていた当時の社会環境を窺うことができるのである。事実、古き時代の英国の言葉には "A woman should be seen, not heard."（女というものは人に姿を見てもらうのはいいが、むやみに口をきくものではない）なる表現が残っているほどである（澤登、1990：88）。一方、平等を唱える民主主義国家としての米国においては、何人に対しても十分なほどに社会進出の機会が与えられており、「家庭的な」

という女性に対する形容表現は決して讃辞表現とはなり得ないのである。両者の国民性の違いを大いに反映した言葉と言えよう。では、米国で「家庭的な料理」を指して 'a homely meal' と言った場合、語用的誤用となるかと言えば、決してそうではない。あくまでも、homelyは相手の姿・形を形容する場合でのタブー語(taboo word)なのである。しかし、homelyという言葉が、たとえ米国人にとって「不器量な」という意味で忌み嫌われる語であるにしても、それが決して姿・形から派生したものではない点も知り得るべきであろう。女性の「内」に向くライフスタイルをもって意味の転用が生じたわけであり、多民族国家ゆえの、一概に「美人」・「美男子」に対する価値基準を定めにくいという文化特性が手伝ってのことである。

いずれにしろ、homelyに代弁されるように、英・米双方の文化に対する安易な般化は、ときに、修復不可能なまでの失敗を引き起こさないとも限らない。語彙の無造作な使用には十分な配慮が必要であろう。

3．米国志向の中の「英国」への気づき

「アメリカナイズ」という言葉はあっても「イギリス・・・」という言葉をわれわれ日本人は決して使用しない。しかし、米国を志向する現実の社会生活の中に浸透している語彙には、前章でも考察したように英国との間での方が社会的距離が短いものも希ではない。以下に例示してみたい。

(1) takeaway/takeout

外食産業、とりわけ、大手米国ファーストフード・チェーン店の進出によって、テークアウト (takeout) という言葉が日本人の食生活の上で身近なものになっている。日本語では、これを「お持ち帰り」と訳しているが、いささか違和感を覚えざるを得ない。*Webster's College Dictionary* (1991) を調べてみると、次のように定義づけられている。

to carry out for use or consumption elsewhere

理屈っぽくなるようであるが、持ち帰り用に調理された食材を必ずしも「自宅に持ち帰る」必要がないにしても、われわれ日本人の生活感覚の中では、外での立ち食いは未だ抵抗感をともなう。逆に、米国のような大陸的な国では、商用としてのダウンタウン(downtown)と安住の場としてのベッドダウン（commuter town）には、自ずと時間的・距離的な開きがあり、いくら洗練された車社会とは言え、持ち帰った頃には既に冷めやって、また、空腹を即座に満たすにも無理がある。こう考えてみると、takeoutという概念と「持ち帰り」という概念は、直には結びつきにくい。むしろ英国との方が社会的距離がより短そうである。国土面積244,046㎢と日本（377,765㎢）よりも遙かに小さなこの島国において、自宅に「持ち帰る」という行為が、ごく一般的であるのは想像に難くない。したがって、英国ではtakeoutの代わりにtake-awayを用いる。街中に、Chineese Takeaway Shopが隣立する光景も珍しくない。事実、*COBUILD*においても、次のように、「自宅に持ち帰る」という概念が優先して示されている。

takeaway:

a shop or restaurant which sells cooked food that you eat somewhere else, such as at home; used in British English

かといって、takeoutを「お持ちだし」とする訳語が日本社会に馴染むかと言えばそうでもなく、日本文化に浸透する英語の語彙と英・米文化との社会的距離は、実に複雑である。

(2) underground/subway

「地下鉄」は英国ではunderground、米国ではsubwayと称される。因みに、前者の場合は、英国に一番古くからある浅い方の地下鉄道を指している。したがって、深いところを走るのは、全部がトンネル式で管のような様子をしているところから俗にtubeとも称される。*The Concise Oxford Dictionary* (1990) 第8版では、次のように定義している（以下、*COD*）。

underground : an underground railway
subway :
a) a tunnel beneath a road. etc. for pedestrians
b) an underground passage for pipes, cables, etc.

つまり、subwayとは「地下道」を指しており、決して「地下鉄」を意味する言葉ではないことが分かる。「地下鉄」はあくまでもundergroundである。では、何故、米国で誤用されるようになったのであろうか、おそらく、鉄道という物が大陸の移動に際しての大衆の最良の交通手段とはなりえずに、むしろ、車を移動の際に重用するところから感覚的な麻痺が生じたのであろう。しかし、世界に誇る日本の地下鉄の入り口における英語表示を眺めて見た場合、概ねsubwayであることを考えると、いかに日本で使用される英語が無紛別に米国を指向しているかが明らかとなる。

昨今のわが国の社会生活を眺めてみると、「食」生活に始まり「職」生活にいたるまで、数多くの米国式社会システムが浸透し始めている。合理性も手伝って、わが国の米国志向は留まる術を知らないが、ひとたび冷静に自文化に目をやると、その実は無秩序なまでの英米文化の混在に気づくのである。

４．社会システム上の差異

英語語彙と米語語彙を比較した場合、その違いに対して単に英国語法であるとか米国語法であるとしてことたれりとするケースが多々あるが、その違いの「深層」に目を向ける視点は、英米文化理解の上で要となる。幾つかの例を取り上げてみたい。

(1) get in/get on

地下鉄にふれたので、ここで、乗車する際に使用する「乗り込む」という表現を見てみたい。わが国の中高校生が頻用する英和辞書のひとつである *SUNRISE*（1986）の'get on'、'get in' の項を引いてみると次のようにある。

get on：

（旅客機・列車・バス・馬などに）乗る、乗車する

When the train arrived, he got on. 列車が着くと彼は乗った。

get in：

（車などに）乗る

列車に乗り込む際にはあたかも区別して使用する響きを与えている。実際、たいていの日本人英語学習者は、列車に乗り込む場合にはこの区別のようにget onを連想することであろう。しかし、英国ではget inはごく一般的にみられる用法である。では、英米によるこの 'get in a train' なる英国語法と 'get on a train' なる米国語法の差はいかなる点に由来するのであろうか。たとえば、英国語法として 'in the street'、米国語法として 'on the street' という表現差がある。道が建物に囲まれている英国の都市と、道が平原上に走りそれに沿って建物が建てられている米国の都市の成立事情を反映したものである

と言われている。同様に、英国の列車は客車の中が幾つかの部屋のように分かれていて中に入る感じであり、米国では、初期の時代にはプラットフォームのない駅から列車に飛び乗る感じであったと言われている。しかし、大塚（1990：99）も指摘するように次第に米国語法の影響を受け、若者の間では、'get on a train' に変わって来ているようである。

(2) business bachelor

研究社の*Merriam Webster's Japanese-English Learner's Dictionary*（1993）で「単身赴任」を引いてみると、'taking up a new post and leaving one's family behind' と定義し、'business bachelor' と示されている。日本社会のビジネスシーンを上手く代弁した表現である。果たして、英米の文化においてbusiness bachelor、すなわち、「仕事上の独身」なる言葉は実感をともなって受容されるであろうか。仕事が家庭に優先する日本社会システムと家庭が仕事に優先する英米の社会システムでは、単身赴任のイメージは随分と異なるはずである。実際、教壇において学生に「単身赴任とはどれくらいの期間をイメージするか」の問いを発してみると大方の答えが「数年単位」であった。もし、英米社会において数年単位で、ひとり、家族を置いて離れることとなれば、もはや家族関係の危機は免れない。複数年次契約で日本のプロ野球界に単身赴任した選手が家庭崩壊の危機を理由に帰国したケースは良く知られるところである。こと「単身赴任」に関してみると、秋澤（1992：114）も指摘するように 英米両文化ともに、'a weekday bachelor' または 'a weekend father' の方が馴染み易そうである。

(3) tea

teaといえば米国よりも英国を連想することであろう。しかし、このteaには、次のような意味が含まれているのは興味深い。

tea :

the main meal that a family has in the early evening

This meaning of tea is used in Britain especially by working-class people and in the north. (*COBUILD*)

すなわち、米国においては、「夕食」を指すときに決してteaとは言わず、たいていの場合はdinnerである。おそらく、共働きが当然となっている米国社会において、家族が会してコミュニケーションをバレーボールのごとく楽しみながら食事できる時間が唯一夕食時だからなのでもあろう。したがって、英国の知人宅を訪れた米国人が、知人と共にbiscuitを食みながらafternoon teaを楽しんだ後、再び早めの夕食として "Tea's ready." なる表現を耳にすれば、さぞ奇異な感じがすることであろう。国が変われば、語の持つ指示範囲も随分と異なるものである。しかし、英国におけるteaとは、儀式的（ritual）な響きを持つ語であることを考えると納得が行く。dinnerとは本来、「正餐」の意味であり、決して夕食のみに限定される必要はない。夕食は、supperである。昼にlunchを食べ、夜にdinnerを食べても結構であるし、昼にdinnerを食べて、夜にsupperを食べても結構なのである。ただし、後者の場合は、英国における労働者階級の習慣でもあり、朝の出勤が早いことによるせいかどうかまでは定かではないが、それが故の早めの夕食に対する呼称としてのteaなのであろう。

(4) B＆B

B＆BとはBed and Breakfastのことであり、文字通り「一泊朝食付きの宿屋」を指すのであるが、英国において発祥したB＆Bと米国で見かけるB＆Bとでは随分と趣を異にする。英国人の朝食風景は、オレンジジュース（orange juice）、ミルクをたっぷり入れたティー（tea）、オートミールの粥（porridge）、ベーコンと卵（bacon and egg）に始まって随分と量質が多く、

始めて訪れるわれわれ日本人を驚かせる。したがって、手頃な料金で一宿一飯を供することのできるB＆Bとは、列車を降りて僅かな時間でたどり着く範囲内にみかけることができるように、正に英国人の生活にとって密着した存在と言えよう。かたや、米国人の朝食は、比較的軽く、むしろ車社会を反映し、気楽に宿すことのできるモーテル（Motel=Motor and Hotel）の低経済性の方が彼らにとっては魅力であり、その普及度もB＆Bを圧倒している。したがって、英国を旅した者が同じ感覚で米国版B＆Bを探すとなると大層な料金を払う羽目になることもしばしばである。「島国」と「大陸」では、同じ用語をめぐっても、意味付与上の概念がかなり異なるようである。

5．英国的伝統と米国的合理性

英国は、伝統文化の国とも称される。伝統を重んじるがために生ずる米国との風俗・慣習・制度を始めとする文化的差異も希ではない。一方、歴史の浅い米国にとって、伝統に固執しないがために生じる合理性が英国との文化・社会的距離をもたらすこともしばしばである。

(1) To Let/For Rent

英国を旅していると街中で、'To Let' なる表示をしばしば目にする。日本人英語学習者には、'rent-a-car'、'rent-a-cycle' など既に耳に馴染んでいる関係から、また、letという使役動詞の優先的発想からも、意味をとらえるには抵抗感をともなう表現である。しかし、ここでのletはもちろん使役動詞としてのletではなく、「貸す」という意味での他動詞letである。つまり、「貸し家、貸し室あります」の意の広告表示である。明らかに、「(家や土地）を賃借する」の意のrentを使用した方が分かりやすい。では、なぜ、英国ではTo Letと表現するのであろうか。これを英文に当てはめて考えると "This house is to let."、"This room is to let." であることが容易に推測できる。もちろ

ん、米国なら "This house is for rent."、"This room is for rent." である。しかし、前者の場合は、letの目的語が主語との関係で一体何になるのか意味不明である。つまり、「部屋」が何かを「貸す」のではなく、「部屋」は「貸される」ものである。この不自然さに対して鈴木（1997：88）は、「英語では，「be動詞＋to不定詞」は「予定」「運命」「命令」「義務」「意志」に加えて、その古い時代には「可能」「当然」の意味を含む「受身」の用法があった」ことを説明し、ドイツ語の影響、すなわち、ゲルマン語文法の名残りを指摘している。「伝統」とは古きいにしえの文化を伝承して行くことである。そう考えると、イギリス英語というものがいかに伝統にこだわるかを窺い知ることができるようである。因みに、英国の地名には、米国による借用とは異なって、Hampstead, Hampton, Birmingham(home), Manchester, Chichester, Rochester(camp), Stratford, Stratton, Strefford(street), Preston, Brighton, Northampton(town) など無数のゲルマン語の痕跡を垣間見ることができ、実に興味深い。他方、米語特有の「生意気な」（impudent）の意味合いで使用されるfreshもドイツ語のfrech（図々しい）からの誤用によるのだからますます興味深い。参考までに、その語義を付記しておきたい。

If someone is fresh with you, they behave or speak in a way that is too friendly and therefore disrespectful ; informal expression, used showing disapproval. (*COBUILD*)

(2) fox hunting

英国で伝統的なもののひとつに「狐狩り」があげられる。 愛好家達は相互に会費を出し合い、M.F.H. (Master of Foxhounds)を決め、狐狩りのための猟犬係への謝礼や犬小屋の維持などもろもろの管理を委託してわずかな猟期を楽しんでいた。また、M.F.H.になること自体も名誉なことであると受けと

られていた。アングロ・サクソンの時代から続くといわれる伝統的スポーツを楽しむ国民が、動物愛護協会（Society for Prevention of Cruelty to Animals）を最初に設立した国の国民であるのだから理解に苦しむところである。いずれにしろ、今も伝統的スポーツとして連綿と続いてはいるが、17世紀中頃まではスポーツの目的としてよりも、むしろ作物に害を与えるのを防ぐために狐を撲滅しようという意味合いで行われていたようである（井上、1971：367）。そのような意味からも、「狐」に対するイメージは、あまり芳しいものではない。日本人が「狐につままれる」などと表現するのと同じように、foxを英国人は、「欺く」という意味で使用したりする。一方、米国俗語であるfoxには「非常に魅力的な女性」（an extremely attractive female）の意味があり、'foxy lady' などと称して女性を讃辞する言い方が流行った時期もある。もちろん、最近の若者はfoxyという表現よりもcuteを多用するのだが、それにしても米国民がいかにカジュアルな国民性を有するかが分かり得よう。

(3) bobby/cop

カジュアルといえば、英国人に語らせれば、米国人の英語ほど難解なものはないという。余りにも数多くの意味不明なるスラング（slanguage）を多用する米国人を風刺してのことであろう。また、それが英語の観点から見た場合、きわめて古い表現であったりし、余計に滑稽な響きをもつためでもあるようである（鈴木、1985：58）。たとえば、米国人は、警官を指してcopという俗語表現を用いるが、英国人はbobbyという俗語表現を使用する。copはcopperから生じた言葉である。その定義は次のように示されている（下線部、筆者）。

copper：

a policeman or policewoman；<u>used in informal British English</u>

Eg. *You'd better wait till the coppers turn up*. (*COBUILD*)

正に、前述の指摘に一致する。一方、英国人が使用する俗語表現としてのbobbyの由来はいかなるものであろうか。bobbyとは、実は、1828年にロンドンの保安警察令（The Metropolitan Act）を発布して、警察制度の改革を促した政治家の名前であるRobbert Peelに由来している（井上、1971：137)。すなわち、Robertに対するBob, Dob, Rob, Robinなどに並ぶニックネームとしてのBobbyなわけである。同じニックネームを冠したthe johnなる英語を「お手洗い」の意で使用する米俗語とは異なり、ユーモラスな意味合いでその高尚な発想を垣間見ることができ、「伝統尊重の国民性」の一端を垣間見る思いである。では、米語表現が「伝統」を反映していないのかといえば、そうでもなく、「熊」のどう猛さからイメージされた俗語表現である "You are a bear." (あなたは、とっつきづらい人) という言い方がある一方で、米国民の愛玩人形である 'Teddy bear' が、熊狩りの愛好者であった大統領Theodore Roosevelt（1858-1919）に由来するのだから面白いものである。

(4) cricket/baseball

cricketは英国に発達した夏の伝統的スポーツであり、国技でもある。かたや、baseballはその起源こそ明らかではないが、cricketの源である英国の球技(grounders)に基づいて発達したものであると言われている(井上、1971：79)。わが国でも親しまれているサッカー、ラグビー、テニス、ゴルフを始めとするほとんどのスポーツが英国に発祥して伝えられてきたものであることを考え合わせると、互いにルールが似通っているcricketよりもbaseballの方が受容されたという意味では興味深い。ルールに関する細かな説明はあまりにも複雑なために省略するが、同じ投手・打者・野手による守備対攻撃の図式であるにもかかわらず、明らかにbaseballの方が分かりやすいようである。あらためて、米国人の合理的精神に思いを寄せるのである。しかし、より関

心を誘われるのは、あまりにも複雑性を帯びたルールを有するこの、一見、非合理的とも思えるスポーツが何故に、英国国民に愛され続けるのかという点である。この点に関して、ミルワード（1978：98）は、“ It's not playing cricket. =It's not cricket.” という英語表現に見られる英国人の倫理道徳感を指摘している。

not cricket :

British colloquial. Underhand or unfair behaviour. (*COD*)

複雑とはきめ細かなルールの裏返しであり、「道徳的に曲がったことをしない、正直にふるまう」フェアプレーの精神がより一層要求されるわけである。「伝統」と「非合理性」の共存関係を考える意味で参考となる。

6．異質性の中の同質性

「伝統」と「非合理性」、「非伝統」と「合理性」を考える上で、参考となり易いものに「綴り」の違いがあげられる。たとえば、英国式綴り字法と米国式綴り字法を比較してみたい。左欄は英国式、右欄は米国式である。

colour/color	centre/center	civilise/civilize
behaviour/behavior	metre/meter	pyjamas/pajamas
parlour/parlour	theatre/theater	programme/program
humour/humor	plough/plow	cheque/check
neighbour/neighbor	realise/realize	good-bye/good-by

英国式綴り字の方が、今でも古い伝統的綴り字体を用いている一方で、この米国式綴り字の違いは、米国最大の辞書編纂者であるNoah Webster

(1758-1843)の手によるところ大である。国家の独立は、英国英語からの独立でもあり、米国式綴り字法・文法・発音法の確立のために情熱を傾けたWebsterにとって、米国合理主義精神からすると実際音声に即さない英国式綴り字体はいかにも非合理的なものであった。独自に加工処理されていった背景には米国民の精神性が大いに反映されていたわけである。そんな中でも例外はあるものである。たとえば、「ウィスキー」をwhiskyと綴るのは英国式であり、whiskeyと逆にeを付加して綴るのは、米国式である。もちろん、米国ではwhiskyとも綴るが、商品表示においては、バーボン(bourbon)、コーン（corn)、テネシー（Tennessee）の各ウィスキーの90パーセント以上がwhiskeyと綴られており（森、1991：26)、国産品と輸入品の間での区別が促されている。「スコッチウィスキー」(Scotch whisky）と「バーボンウィスキー」(bourbon whiskey)との市場をめぐる攻防においては、さすがの米国人も「綴り字の合理主義」にはこだわらなかったようである。

さらに、もうひとつだけ、米国式綴り字法の合理性の範疇から外れる例を示しておきたい。それは、世界に名を馳せたスペースシャトルの名前としてのEndeavourである。米国式綴り字法では、Endeavorでなくてはならない。当然、それなりの意味があるわけである。その答えをめぐっては、アメリカ航空宇宙局（NASA）のウェッブ•ページが参考となる（http://www.ksc.nasa.gov/shuttle/resources/orbiters/endeavour.html)。

"Endeavour, the newest addition to the four-orbiter fleet, is named after the first ship commanded by James Cook, the 18th century British explorer, navigator and astronomer. On Endeavour's maiden voyage in August 1768, Cook sailed to the South Pacific (to observe and record the infrequent event of the planet Venus passing between the Earth and the sun). Determining the transit of Venus enabled early astronomers to find the distance of the sun from the Earth, which then could be used as a unit

of measurement in calculating the parameters of the universe. In 1769, Cook was the first person to fully chart New Zealand (which was discovered in 1642 by the Dutchman Abel Tasman from the Dutch province of Zeeland). Cook also surveyed the eastern coast of Australia and navigated the Great Barrier Reef and traveled to Hawaii.”（下線部、筆者）

つまり、Captain Cook（1728-1779）として知られる英国の探検家であるJames Cookの「エンデバー号」による処女航海に因んだものであることがわかる。国家アイデンティティーを確立するためにも、頑なに英国式綴り字法を拒否した米国にとって、国家的プロジェクトの代名詞とも言える宇宙事業は、世界のリーダーとしての米国を表象するのに最適の場でもあるのだが、敢えて英国式綴り字法を採用するその国民性には共感する次第である。

7．おわりに

本稿において筆者が比較対照とした語彙はごく僅かである。しかし、その意図は、決して特定の語彙をとりあげて英米両国の文化・社会的距離を測ろうとするものではない。あくまでも語彙理解こそ英米文化理解のための宝庫であることを指摘し、両文化の深層への気づきを促したかったのである。巷に、英米の文化を語る書は実に数多く存在する中で、その真の素顔に迫ろうとする書物が意外に少ないという実感も手伝ってのことである。「国際理解」、「異文化理解」と叫ばれて久しいが、依然、日本人は、異文化に暮らす人々の表面的異質性と精神的異質性を同一視する傾向にあり、英米文化もその例外ではない。しかし、ひとたび、両文化の深層へ思いをめぐらしてみれば二つの文化の社会的距離とは、意外に近そうで遠く、そして意外に遠そうで近かったりすることに気づくのである。英米文化理解、そして異文化理解の原

点に触れる意味でも、あらためて、身近な題材を多面的な視点で見つめ直し、当該文化の内包に共感的な見地から目を向けてみる必要があるのではなかろうか。

参考文献

秋澤公二（1991）『アメリカ人の英語』丸善、pp.34-35.

Asama, M. & Fujino, T. (1997) *BOTH SIDES OF THE POND*, Tomondo.

井上義昌(編)、(1971)『英米風物資料辞典』開拓社

岩崎春雄他(訳)、(1989)『英語物語』文芸春秋、pp.356-372.

牧英夫(編)、(1989)『世界地名ルーツ辞典』創拓社

森護、(1991)「英国史の中のスコッチ・ウィスキー」『英語教育』7月号、大修館、pp.26-28.

大塚高信・小西友七（共編)、(1990)『英語慣用法辞典』三省堂

ピーター・ミルワード（別宮貞徳訳)、(1978)『イギリス人と日本人』講談社

澤登春仁、(1990)『英語的思考』講談社

鈴木寛次、(1997)『発想転換の英文法』丸善

_____、(1985)『こうちがう!!イギリス英語とアメリカ英語』桐原書店